

# ソーシャルワークにおけるアセスメント

— 研修プログラム開発の枠組み —

大谷京子

## 要旨

ソーシャルワークにおけるアセスメント概念を、先行研究を通して整理した。アセスメントは、ソーシャルワーカー主導でクライアントの問題を把握する情報収集と分析のプロセスとされていた。しかし徐々に、問題に焦点を絞るのではなく、クライアントの置かれている状況を、クライアントと共に理解していくことを指すように変化してきている。また、アセスメントプロセスについてモデルを提示した。すなわち、ソーシャルワークプロセスの中に、情報収集 アセスメントという段階があるのではなく、ソーシャルワークの全プロセスを通じて、アセスメント/リアセスメントという循環がクライアントとの協働でなされているというものである。

以上を踏まえて、研修プログラム開発を目指したアセスメントプロセスの操作定義を、「クライアントとワーカー、そして周囲の状況を、ワーカーとクライアント双方が理解するためになされる、情報収集と分析のプロセスであり、ワーカーは専門的価値に基づき知識を導出し、クライアントは固有の経験知に基づき、協働して目の前の現実を解釈し共有するプロセスである」とした。

ニーズ主導アセスメントプロセスを、交換モデルで展開するための、ソーシャルワーカーのスキル向上を目指すプログラム開発のために、さらにアセスメントスキルを明らかにすることが今後の課題である。

キーワード：ソーシャルワーク、アセスメント、プロセス、レビュー

ソーシャルワーカーが効果的に実践力を向上させるためには、アセスメントスキルの成長が必須である。ソーシャルワーク実践にとってアセスメントの重要性に、異論の余地はない。それは効果的なソーシャルワーク実践の礎石 (McDonald 1999)、中心概念 (太田 1995)、中心的役割

(Aviram 2002), 援助の要であり, 効果的援助はアセスメントにかかっている (中村 1994) とされてきた. Milner & O'Byrne (2002) は, アセスメントが有効なら, 介入が成功する可能性は高くなるとしている. さらにアセスメント力のなさは, ソーシャルワーカーの存在意義に関わる (原田 2010) とさえ言われている. 当事者を調査協力者とした質的調査でも, 専門職に求める能力としてアセスメントが抽出されており (Young et al. 2000), クライアントからも必要とされる実践力なのである. しかし, 未だ用語の解釈も共有されておらず, 具体的内容や作業方法については混乱が残る (Crisp et al. 2004; 中村 1996; 齊藤 1996; 齊藤 1995; 太田 1995). 一方実践現場では, それらが標準化されないまま, 「職人芸」として展開されている (岩崎 2002).

そこで本論文は, アセスメントスキル向上を意図した研修プログラム開発のための枠組みを提示することを目的とする. そのために, ソーシャルワークにおけるアセスメントに関する先行研究を整理し, 実態に即したアセスメントプロセスのモデルを提示することを目指す.

なお本論文で「スキル」とは, 「ソーシャルワーカーの事象の認知・認識能力, 価値実現に向けての援助行為への変換推進能力からなる実践能力 (competence) が, ソーシャルワーカーをして具体的援助行為に示される熟練した統合的一体的技術表現」(平塚 2004: 11) を指すこととする.

## ． アセスメント概念の変遷

Richmond (1917) は「診断は, クライアントの社会状況とパーソナリティを明確にするための試み」と定義し, 調査や証拠集めから始まり, 証拠の批判的検査と比較が続き, 最後に社会的困難の解釈と定義に至るとした. Hamilton (1951) は, 問題の状態とその原因に向かう思考プロセスであり, クライアントが提示した問題やニーズの状態に関する, ワーカーの専門的意見であるとした. Perlman (1957: 164) は「問題を作る要素を調べる知的活動とし, その特有の性質となりたちの重要性, 問題をつくる要素間の関連, 要素と解決手段との関連を知るプロセス」とした. また, 何が問題で, それがいかにクライアントの目標と関連し, 機関, ケースワーカー, クライアントはその問題にどんな手段で関わるか, これらの結論が診断の成果であるとした (Perlman 1957). Hollis (1964) は, 内容・目的, 方法といった治療計画を作成するのが目的であるとし, そのプロセスは, 問題がどこにあるかの評価, 因果関係も含む関連の明確化, 類型化という3段階を踏むとした. つまり関心は, クライアントの問題と問題を取り巻く状況に向けられ, 問題の原因やそこに関連する要素について専門的に評価するプロセスと捉えられている.

こうしたアメリカの初期のケースワークを日本に導入した竹内 (1938: 49) は, 「クライアントを本当に理解し救うには, 問題が発生し, 悪化している社会的状態を知る」ことが大切だと主張した. またワーカーの第一になすべきこととして, クライアントが落ち込んでいる社会的「状態」を見極め, 問題に関わる全ての人の心理や, それらの相互作用や, そんな心理状態がどうして起こるにいったか, どう変更されうるかを克明に書き下すことを挙げた. そして重要な事実

が収集されたら、社会学的背景、問題または「不調整」の分析に基づいて、正しい解釈ができるまで仮定を検討し、診断を下すとした。さらに社会診断・治療のためには、客観的で一貫した基準が必要であるとし、肉体/職業/消費/家庭/文化/社会/思想/宗教という8生活領域における生活基準を提示し（竹内 1949）、21 分類 124 項目の調査項目も提示している（竹内 1950）。

このように草創期からのソーシャルワークは、クライアントの問題に焦点を絞り、その原因と解決策を見出すプロセスを「診断」と呼び、精神分析の様式を色濃く残していた。しかしこうした医学モデルのソーシャルワークへの批判が高まり、診断にかわる新しい概念が模索されるようになった。

「診断」に代わる概念として「アセスメント」が初めて使われたのは、1970年のパートレットによる『社会福祉実践の共通基盤』においてである（中村 2002）。パートレットはそこで、「アセスメントとは、ソーシャルワークにおける価値と知識のかけ橋であり、それらの応用である。ワーカーは行動を起こす前に状況を分析し理解する責任がある」とし、そのプロセスとして、対処すべき主要な要因を明らかにするための状況分析をする、最も重要に見える要因を明らかにし、それらの関連を定義し、扱うべきものを選択する、可能性のある結果を予測し、ソーシャルワーク活動のいろいろな方法を検討する、取るべき特定のアプローチや行動の決定をする（Bartlett 1970）という4段階を提示した。こうして70年代に入ると、人の精神内界への偏重から、環境や利用者システムに視野が広がるようになる。Pincus & Minahan (1973) は、アセスメントは状況に関連する、あるいは影響を受けているものを明らかにすることであること、問題は人が持つものではなく、アセスメントは人を問題としてレッテル貼りすることではないことを主張している。

このような診断からアセスメントへの転換の背景には、ソーシャルワーク統合化の動向、ソーシャルワーク実践のパラダイム転換（医学モデルから生態学的アプローチへの転換と一般システム理論を背景にしたエコ・システム論的視点への転換）、ケースマネジメントの動向（齊藤 1996）があった。診断とアセスメントとの相違点として中村（1994）は、基礎的学問と視点の相違（精神分析/システム理論や生態学理論）、対象の規定の仕方（個人か家族/生活の視点から広範な対象を想定）、情報収集の方法の相違（面接中心/多機関の資料や家庭訪問などあらゆる情報を常時収集）、価値観の問題（価値を含んだ評価を伴う/客観的に状況を把握するので価値を含まない専門的判断）の4点を挙げている。つまり単なる用語の転換ではなく、認識論も方法論も変容が迫られていたのである。

80年代には、アセスメントはソーシャルワークの本質と認識されるようになった。さらにはポストモダンの影響により、真実を説明できる唯一の理論などなく、それは解釈されるものだと理解されるようになった。構成主義では、困難を経験する個々の主観的な意味が中心におかれ、クライアントの物語、クライアントによる世界の見方が重視される。このアプローチでは、一つの物語は他のものと同じように真実であり、実践においては唯一の真実ではなく、「実用的な真実」が求められる（Milner & O'Byrne 2009）。物事は変化するため、その真実も一時的なもの

である。そう考えると、どんなアセスメントも、継続するアセスメント・リアセスメントプロセスの一部にすぎない (Beckett 2010) ということになる。専門職の評価であっても、それが絶対的なものでなく、一面的な理解にすぎず、常に改訂が必要であると考えられるのである。そこでは専門職の立場は「知らないということ」、「脱 - 専門性」、「礼儀正しい見知らぬ人」という用語で説明され、ワーカーの責任は相互理解と相違への寛容性を育むこと、多様な新しい考えが生じような会話的空間を作り出すことになる (狭間 2001)。

20 版の Encyclopedia でアセスメントは、「クライアントを環境システムの文脈において理解し、クライアントの強さと問題を見出すことを目的になされる、継続的な情報収集のプロセス」とされている。日本でも、1970 年代～90 年代にかけて実践モデルの多様化とパラダイムの転換期があり、アセスメントも、総合的・包括的な状況認識の過程と捉えられるようになった (小原 2000)。齊藤 (1996) はレビューをふまえ、「状況に関する認識の過程」であること、取り扱う状況に関して情報を収集し分析を行うこと、計画やインターベンションの基礎となる情報提供をすることという、アセスメント概念の共通点を提示した。しかしながら現在にいたるまで、その用語の定義は共有されておらず、論者によって差異がある。主な違いが現れているのは、1. 計画や介入までアセスメントに含まれると包括的に捉える広義の立場と、援助計画と実践の展開に必要な情報の認識過程とする狭義の立場、2. 解釈を含むか、3. 価値志向とするか、4. クライアントとの協働作業とするか、5. ワーカー側の情報も情報収集の対象とするか、といった点である。

1. 計画・介入を含むかについて、藏野 (2005) は、Generic モデルの台頭で、従来の計画や介入まで包括的に捉える広義の立場から、「必要な情報の収集と処理を通じ、クライアントとその生活をめぐる問題と状況の構成や要因の理解と、援助計画と実践の展開に必要な情報の系統的提供を目的とした援助活動の認識過程」という狭義の立場に移行してきたとする。Milner と O'Byrne (2009) も、アセスメントと介入は区別され、前者はケアの対象や取り組む問題を明らかにすることに焦点が絞られ、後者はこれらのニーズに合う適切な手段を選択することに焦点を絞るとする。しかし一方で Milner と O'Byrne (2009: 4) も、アセスメントプロセスに「どのように、誰によって、いつ、何をすべきか、さらにどんな変化が見られるか、決断 (decision-making) し提言すること」を含めており、極めて計画との区別が難しいステージをもアセスメントプロセスに内包している。また平塚 (1991) も、事前評価という一連の科学的手続きの中に、目標設定と、目標達成の方策を立てるところまで含めている。中村 (1988) も、採用すべきアプローチと活動の決定というプロセスを、アセスメントに含めている。このように、広義と狭義という区別も不明瞭な状況である。

本研究では、研修プログラムという性質を踏まえ、より焦点を絞り、限定したプロセスを想定する必要があると考えた。そこで、計画や介入を検討するための材料の提示までをアセスメントプロセスとし、情報収集と分析の成果 (現状理解) をクライアントと共有するところまでを指すこととする。

2. アセスメントの内容に事実認識に対する評価や推理、解釈という一定の因果関係を立証す

る価値判断を入れるかには異論があり、広義では価値判断を含むし、狭義では次の局面への情報提供であり、状況認識にすぎないと考える(太田 1995)。中村(1988)はクライアントの現在の状況に焦点を当て、ワーカーの価値や解釈を排除し、事実に即した評価であるとしている。一方 Burack-Weiss & Brennan (2008) は、クライアントに関する事実の蓄積ではなく、解釈であると主張する。Parker, & Bradley (=2008) も、Beckett (2010) も、情報をいかに集め、どのような解釈をするか決めていくプロセスも含むとしている。この違いは、認識論の違いによると考えられる。実証主義に立てば、価値や解釈を排除した事実は存在し、社会構成主義に立てば、文脈によって作られるストーリーのみが存在することになる。ただ定義としては、「理解」のための認識プロセスであることは共通している。

本研究では、後述するが、状況は多様な見方ができるもので、全てを「客観的事実」として捉えられるものではないと考える。したがって、クライアントとの対話を前提に、双方の解釈の交換がアセスメントの重要なプロセスであると考え、その対話も研修の重要な焦点の1つになると想定している。そこで、ワーカーとクライアント双方の解釈を含むものとする。

3. 価値志向について、前述のように、中村(1994)は、客観的に状況を把握するので価値を含まない専門的判断としている。しかし Bartlett (1970) は、個々の専門職の知識、価値、技術という基準枠に基づいてアセスメントはなされ、そこでなされる専門的判断は知識と価値を橋渡しするとした。Parker & Bradley (=2008) も、アセスメントに価値は重要で、反抑圧的な焦点を維持すれば、ストレングスやクライアントへの敬意を保持することにつながると主張している。Beckett (2010) も、重要だと思ふ事柄を選んで情報を集める情報収集さえ価値に無関係ではなく、アセスメントには情報の解釈やそれに続く行動があるので、価値判断に基づくとする。このように多くの論者がアセスメントを「認識過程」として捉えており、基礎にソーシャルワークの価値があることは共有できる。ただそれを「アセスメント」というプロセスを構成する要素として取り上げるかどうかの差であると考えられる。

本研究では、情報収集も分析も、ワーカーの拠って立つ価値に基づいて判断をしながら行われると考える。したがって価値志向性は否めないという立場を採用する。

4. クライアントとの協働については、診断主義のケースワークにおいては想定されておらず、ワーカーが情報収集し、ワーカーが理解することに主眼が置かれていた。現在でも、クライアントを専門職側の言語系によって測り定めること、定義することや分類すること、ある概念に落ち着かせることも含む(米本 2005)とされ、問題定義はクライアントが中心であるとしつつ、情報収集、分析、まとめはワーカーの行為として説明される。しかしそもそもアセスメントは、ラテン語の *ad sedere* (横に座ること) に由来する。つまり本来は、調査よりも協働に関心がある(Cree 2000)言葉である。利用者が参加する(Milner & O'Byrne 2009; Bogo 2006; Moxley 1989)ことは条件とされ、クライアントとのすり合わせ(吉村 2003)や対話(Parker & Bradley = 2008; Rapp & Goscha 2006)、相互作用(齊藤 1996)を要件とする論者も多い。多くの論者が、協働プロセスであるという明示をしている

(Beckett 2010 ; 原田 2010 ; 中村 2002). 全英ソーシャルワーク職業基準 (2002) には、ワーカーがアセスメントするのではなく、当事者が自らをアセスメントできるよう支援するとされている (川田 2003). 協働は前提になっているのである.

ワーカーとクライアントでは問題の特定に差があることも明らかにされている (Aaron 1993). つまり、最大限にクライアントとクライアントの置かれている状況を理解し、取り組むべき課題を特定するには、クライアントとの協働が不可欠である. 協働やクライアントの参加が言及されないアセスメント定義もあるが、本研究では協働がアセスメント概念において必須要素であると考え.

5. 収集する情報の内容について、ほとんど全ての論者が、クライアントの問題・ニーズの把握、状況の把握とニーズが生起するメカニズムや背景を理解すること、取り組むべきニーズ (山辺 2011), 歴史的構造的な生活把握 (大野 2009) など、クライアントに関連する情報に終始している. しかし、クライアントシステムを理解し、支援計画の実施や実践展開に必要な資源や方法の提供 (中村 2002 ; 太田 1995) をするためには、支援側の情報も不可欠であろう. それは計画実施のために必要なサービスと資源の情報 (Parker & Bradley = 2008) に限定されず、支援を実施するソーシャルワーカーの力量や、ソーシャルワーカーとクライアントとの関係性も、把握すべき情報として含まれると考える.

以上の項目について、先行研究における差異を踏まえた上で、研修プログラムのための枠組みという本論の目的を考慮すると、アセスメントプロセスの操作定義は以下ようになる. すなわち、「クライアントとワーカー、そして周囲の状況を、ワーカーとクライアント双方が理解するためになされる、情報収集と分析のプロセスであり、ワーカーは専門的価値に基づき知識を導出し、クライアントは固有の経験知に基づき、協働して目の前の現実を解釈し共有するプロセスである」。なお、このプロセスを経て得られた成果であり、クライアントとその周囲の環境についての理解についての記述を「アセスメント」と呼び、「アセスメントプロセス」と区別することとする.

## ．アセスメントプロセスのモデル

「各実践領域や対象などによって、個々のアセスメント・アプローチは開発され」（中村 1994 : 272) るべきだと考えるので、研修プログラムの検討においては、精神保健領域におけるソーシャルワークのアセスメントに焦点を絞ることとする. 精神保健領域では、疾患の急性期状態によるリスクが伴う場合もあり、ソーシャルワーカーがリスクアセスメントを担わざるを得ない状況がある.

加藤 (2001) はリスクアセスメントを、過去と現在の情報を用いて、危害が将来起こる確率および危害の深刻さについて仮説を立て、仮説を検証する系統的なプロセスとし、「時間軸」(緊急度)、「発生確率」、「危害の深刻さ」における理解であるとした. リスクアセスメントは危険性を

生む部分のみに焦点を合わせ、その判定のためにアセスメントを行う（松岡 2001）。精神保健福祉領域におけるリスクアセスメントでは、医療的側面を重視することになる。そこで研修では、より個々のクライアントと置かれている状況の包括的理解と、クライアントとの協働を身につけるため、リスクアセスメントに焦点を絞らないこととする。

さらにアセスメントプロセスには、サービス主導とニーズ主導のタイプがあるとされている。前者は、クライアントがサービスにふさわしい、あるいは受給資格があるかどうかを見極める（Beckett 2010）ための情報収集と分析で、既存のサービスの範囲内で、あらかじめ規定された情報を集め、サービス利用の可否という結論を導く。一方後者は、どんな種類のサービスが提供されるか前提せず、クライアントの実際のニーズは何かを、それが満たされる方法よりも先に考える。したがって利用可能な資源に依存しない（Parker & Bradley = 2008）。あらゆる種類のニーズを定めたところで、これらのニーズをいかに満たすか考える。固有性と複雑さへの敬意を持ち、個別のニーズに合わせたオーダーメイドの創造的なサービス提供の基礎になる。筆者らの開発する研修プログラムの方向性としては、より「クライアントの世界に近づく」（岩間 2001：274）ことを目指し、ニーズ主導アセスメントを前提とする。

また一方でアプローチについては、Smale & Tuson（1993）が、質問モデル、手続きモデル、交換モデルの3つに整理し、先行研究でしばしば引用されている。

質問モデルは、ワーカーが知識と技術を用いてアセスメントし、人のニーズとそれに必要な資源を見定め、安全で適切なケアパッケージを仲介する（Smale, & Tuson 1993）。ワーカーは専門知識を持ち、質問用紙に従って聞き、クライアントの回答を処理する。ワーカーの意図が反映され、データはワーカーの理論にあてはめられる（Beckett 2010）。このモデルのゴールは、手に入る最良のケアパッケージの専門的アセスメントである（Smale, & Tuson 1993）。リスクアセスメント場面に適当なモデルある。

手続きモデルは、クライアントがサービスにふさわしいか、適合基準を満たすかを見るための情報収集をする。質問は、資源の配分の基準に焦点が絞られ、機関がサービス計画を立てるのに必要な情報を集めるためになされる。ワーカーは少ない社会資源と機関のガイドラインに基づいて、サービス提供の範囲内にあるクライアントを対象にする。クライアントや関係者の問題に関する定義は含まれない（Smale, & Tuson 1993）。チェックリストを埋めていくといった、型に沿ったもの（Beckett 2010）で、ほとんどワーカーの判断は必要ない（Milner & O'Byrne 2009）。ニーズではなくサービス主導で、仮に望むサービスを得られても、クライアントはエンパワーされない。このモデルは、コスト効率が良い、最も単純で早いアプローチである（Smale, & Tuson 1993）。

交換モデルは、全てのクライアントは自身の問題のエキスパートと見なされ、情報交換が強調される（Milner & O'Byrne 2009）。利用者とプロセスを共有し、ワーカーは理論モデルを押し付けず、利用者が問題を検討するのを支援するためにこそ専門知識は使われる。ワーカーはエキスパートとしてではなく、自分の専門知を、クライアントの固有の専門知と同等

の重みにするよう努める。ワーカーが、アセスメントしてケアを調整して支援する（暗黙の管理）かわりに、誰が誰に何をすべきか同意に至るまで交渉する。専門職がケアパッケージの全体に責任を持つのではなく、一人ひとりの参加者がそれぞれの貢献に対して責任を負うのである（Smale, & Tuson 1993）。交換モデルのゴールは、当事者が可能な限り豊かな生活を継続するための、手に入る最良のケアの調整である。その過程を通して選択することで、クライアントはエンパワーされる。このモデルでは関係者も多く、時間もかかる（Smale, & Tuson 1993）。また、小さい子どもや認知症のクライアントなど、情報に基づく決断のできない場合は、このモデルは不適切（Beckett 2010）とされている。

Smale & Tuson (1993) は交換モデルで始めるのが効果的であるとするが、Beckett (2010) は、人生は複雑なので、この3モデルの混合でアセスメント面接はなされるべきであるとする。ワーカーと機関が、どこに到達したいか、何を指すかが問われる。資源の配分が主要目的なら、手続きモデルが現実的だが、クライアントはエンパワーしない。誰が何をすべきかの決定は、専門的ニーズ判断によるとするなら質問モデルだが、質問は利用者のためでなくワーカーが状況を理解し結論を出すために作られている（Smale, & Tuson 1993）。ニーズ主導アセスメントには交換モデルがふさわしい（Milner & O'Byrne 2009）。したがって、研修プログラムにおいては、交換モデルによるアセスメントアプローチを追求する。

## ・ アセスメントプロセス

プロセスについて、多くの論者によって多様な主張がなされている（表1参照）。それぞれ段階も、その段階に含まれる要素も異なっている。

これらを整理すると、まず、アセスメントプロセスは繰り返されることを示すプレ・アセスメント、アセスメント、リ・アセスメントという流れを示したものと、アセスメントを生み出すための流れを示したものがある。また、準備段階を含むものと、成果物である「アセスメント」や計画へのつながりを意識したもの、分析の際の具体的認識プロセスに言及したものがある。

以上のような流れで表現されることが多いが、多くの論者が指摘するように、アセスメントは常に更新し続ける。つまりソーシャルワークプロセスの中に「アセスメントプロセス」が独立してあるわけではない。クライアントとの出会いの瞬間から終結にいたるまで、情報収集も分析も繰り返されており、ソーシャルワークプロセスを通して、常にアセスメントプロセスは改訂しながら進行している。しかもそれがクライアントとの協働作業とするならば、クライアントと共に進める側面と、ワーカーがアセスメントプロセスを客観的に観察・分析し、それをアセスメントに反映させる側面（藏野 2005）という二側面があることになる。

つまりワーカー側からみた場合、ワーカーの認識プロセスと、その認識をクライアントと共有するプロセス、さらにはもう一方の主体であるクライアントの行為と認識が並行して進むことになる。プロセスを図示する（図1参照）。

表1. アセスメントプロセスについての先行研究

著者	アセスメントプロセス
Pincus & Minahan (1973)	問題を特定し提示 社会状況の力動の分析 目標と対象の設定 課題と戦略の決定 変革結果の安定化
Hepworth & Larsen (1986)	課題準備 データ収集 データの分析 判断 (Judgement) 決断 (decision-making) と提言
平塚 (1991)	情報収集 問題やニーズ, 状況の見立て 解決しなければならない問題の確定 目標の設定 方策を立てる
Meyer (1993)	調査/研究 推測 評価 問題定義 介入/処遇計画
中村 (1994)	データ収集 データ分析と解説 情報についての決定と介入への引き継ぎ
中村 (1995)	データ収集 データ分析
齊藤 (1996)	プレ・アセスメント (問題や状況のアウトラインを描く) アセスメント (仮説とインタビューで得られた情報を検証・統合して計画や介入の基盤へ) リ・アセスメント (アセスメントを繰り返し, 修正)
藏野 (2005)	プレ・アセスメント (問題や状況のアウトラインを描く段階) アセスメント (プレアセスメントで立てた仮説を, インタビューでの情報と統合) リ・アセスメント (新しい情報・状況によって, アセスメントを修正)
Bogo (2006)	ジョイニング サービスが求められていることの立証 関係形成 情報収集 多様な視点を統合 共通理解の構築 予備的共同計画とゴールの設定
Parker & Bradley (= 2008)	準備・計画立案・従事 データ収集と問題概要の作成 データの予備分析 データの検証・分析 データの使用, 行動計画作成
Milner & O'Byrne (2009)	課題準備 データ収集 データの分析 判断する (Judgement) 決断 (decision-making) し提言
原田 (2010)	情報収集 生活問題状況・ニーズ, ストレngthsを導く
Beckett (2010)	準備 情報収集 データに重みづけ データの分析 分析の活用

アセスメントプロセスにおいて、ワーカーは仮説を立てながら情報収集する。クライアントが、自分の状況を振り返り、言語化した情報、家族の話や他機関からの紹介状など、多様な情報源からの様々な情報を受けてワーカーは、言語・非言語を含めて情報として捉え、仮説を検証しながら状況の理解の要素を組み合わせていく。複数の仮説が棄却され、残された仮説と新たに生まれた仮説を基に、現時点での理解をクライアントに伝える。それを受けてクライアントは自らの見方との異同を判断し、さらに状況を振り返り、クライアントの経験知を基にした解釈を再度フィードバックする。ワーカーは新たな情報を受けながら仮説と照会しつつ、現時点での理解をクライアントに伝える。この繰り返しを続け、ワーカーとクライアントが最終的に理解を共有できたときに、その段階でのアセスメントプロセスのゴールになる。

ワーカーとクライアントの判断は重要な要素であり、判断は価値と知識、そしてクライアントの意思で規定される (山辺 2011)。ここでの判断とは、選択をするプロセスであり、選択のために決定状況について熟考することである。直感的な決断もソーシャルワークにおいては重要だが、

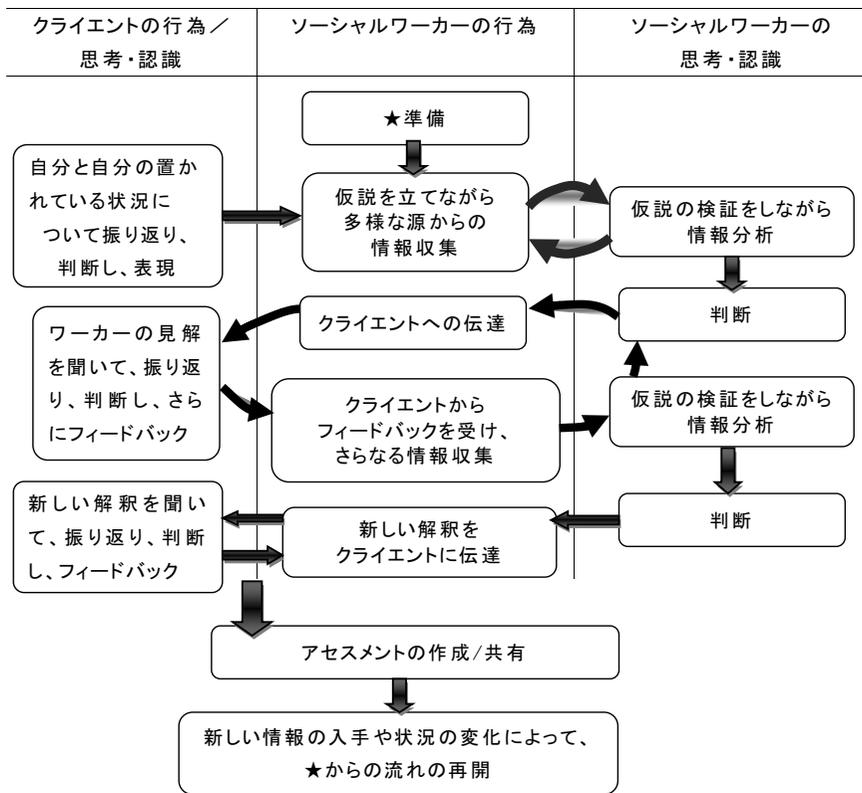


図1. アセスメントプロセスモデル

それは経験を通して蓄積された専門知を基礎としたもので、考えなしの反応とは異なる (O'Sullivan 1999).

このように、アセスメントプロセスは、表面的な行為と並行して、そこに参画する関係者の認識が進んでいるプロセスであるといえる。

先行研究では、行為と認識は区別されてプロセスが検討されていたが、行為の中の省察をする実践家 (Schon = 2001) であるソーシャルワーカーは、常に行為しながら認識している。熟考、判断なしの行為はありえないのである。Meyer (1993) も、経験を積んだ実践者はアセスメントで行う全てのプロセスをほぼ同時に考えることができるとしている。Bogo (2006) はさらに具体的に、常に焦点を深めるか、広げるか、特定の事項についての感情や考え、動機、希望をより深く探るか、測りながら情報収集すると説明している。クライアントの利益、緊急性、許される時間、機関の権能といった要素も考慮し、焦点を絞る事項を決めながらアセスメントプロセスを進めるのである。

そしてアセスメントプロセスのゴールは、ワーカーが利用するアセスメントという成果物を、ワーカーが単独で得ることではなく、ワーカーとクライアントとのアセスメントの共有になる。ワーカーは、判断をしてクライアントにそれを伝えるが、クライアントもまた判断をしてワーカー

に解釈を伝えるという交渉があり、最終的な共有に至るのである。

こうした同時並行する一連の行為と認識のプロセスであるにもかかわらず、情報収集 情報分析と、ステップバイステップ方式で描かれることの弊害があると予測される。個別のクライアントや状況を理解するために必要な「情報項目」がアプライオリに設定されており、それらを網羅する情報収集を行い、その後で分析に入るという手順がアセスメントプロセスであるという誤解を生じかねない。年齢や年金の種類といった、一問一答で得られる項目だけでなく、文脈を加味しなければ理解し得ない情報もある。複雑な要素を組み合わせる状況、実態を理解しようとするプロセスなのだから、情報収集と分析は同時に行われなければ成立しない。例えば、情報分析の中身として、事実の価値の検討、事実間の関連性の確認（平塚 1991）、問題に関連する相互作用や、問題に影響する文化的・社会的事柄の探求、問題に取り組むために導入できそうな個人的・環境的ストレングスと、取り組むべき障壁の探索（Bogo 2006）などが挙げられているが、これらは一つ一つの情報を入手しながら、ワーカーの思考・認識プロセスの中で検討されている事柄である。

以上のことから、研修プログラム開発のためのアセスメントプロセスモデルを言語で表現すると、「クライアントと状況の包括的理解を、ワーカーとクライアントが共有することを目指して行われる、ワーカーとクライアントそれぞれの行為と思考・認識が、同時並行で行われる情報収集と分析のプロセス」になる。

## ．まとめ

ソーシャルワークの要とされるアセスメントプロセスを遂行するスキルを向上させるための研修プログラムを開発するために、アセスメントプロセスの枠組みを明らかにした。ソーシャルワークの歴史の中で、アセスメント概念が変遷してきていることを概観し、クライアントとの協働やアセスメントプロセスの繰り返しが強調されるようになってきていること、それに伴い、ワーカーのあり様もシフトが迫られていることを示した。また、インテークから始まる、単線で連結されるソーシャルワークプロセスの中に1段階として置くのではなく、全プロセスを通して、情報収集する行為と情報を分析する認識が同時並行するモデルを提示した。

これらの枠組みを基に、アセスメントプロセスにおいてソーシャルワーカーに求められるスキルを明らかにすること、その上で評価指標を作成すること、そしてアセスメントプロセス遂行に焦点を絞った研修プログラム開発が今後の課題である。

## 参考文献

- Aaron, Rosen (1993) Correction of workers' personal versus environmental bias in formulation of client problems, *Social Work Research & Abstracts*, 29 (4), 12-17.
- Aviram, Uri (2002) The changing role of the social worker in the mental health system, *Social Work*

- Health And Mental Health, 35 (1/2), 615-632.
- Bartlett, Harriett M. (1970) *The Common Base of Social Work Practice*, Natl Assn of Social Workers Pr.
- Beckett, Chris (2010) *Assessment & intervention in social work: Preparing for practice*, SAGE Publications Ltd.
- Bogo, Marion (2006) *Social work practice: concepts, processes, and interviewing*, Columbia University Press.
- Burack-Weiss, Ann., & Brennan, Frances Coyle (2008) *Assessment, case planning, ongoing work, and termination*, *Gerontological Supervision* Second ed., The Haworth Press, 53-62.
- Cree, Vivienne E. (2000) *The challenge of assessment*, Cree, Vivienne & Macaulay, Cathlin ed. *Transfer of Learning in Professional & Vocational Education*, Routledge. 27-52.
- Crisp, Beth R., Anderson, Mark R., Orme, Joan, & Lister, Pam Green (2004) *Learning and teaching assessment: reviewing the evidence*, *Social Work Education*, 23 (2), 199-215.
- Hamilton, Gordon (1951) *Theory and practice of social case work*, 2nd Ed., Columbia University Press.
- 原田聖子 (2010) 「ニーズ・アセスメントとソーシャルワークの存在意義」『東洋大学大学院紀要』47 ; 137-150.
- 狭間香代子 (2001) 『社会福祉の援助観 ストレngths視点・社会構成主義・エンパワメント』筒井書房.
- Hepworth, Dean H., & Larsen, Jo Ann (1986) *Direct social work practice: theory and skills*, 2<sup>nd</sup> ed., Dorsey Press.
- 平塚良子 (1991) 「対人援助における事前評価」奥田いさよ編著『対人援助のカウンセリング その理論と看護・福祉のケース・スタディ』川島書店.
- 平塚良子 (2004) 「ソーシャルワークにおけるスキルの意味」岡本民夫・平塚良子編著『ソーシャルワークの技能 その概念と実践』ミネルヴァ書房, 1-20.
- Hollis, Florence (1964) *Casework: a psychosocial therapy*, Random House.
- 石川准 (1992) 『アイデンティティ・ゲーム』新評論.
- 岩間伸之 (2001) 「ソーシャルワークにおけるアセスメント技法としての面接」『ソーシャルワーク研究』26 (4), 273-278.
- 岩崎香 (2002) 「精神障害者に対するケアマネジメントの実際と課題 アセスメント機能を中心に」『介護支援専門員』4 (5), 39-42.
- 加藤純 (2001) 「児童虐待への介入に際するリスクアセスメント・モデル」『ソーシャルワーク研究』26 (4), 299-305.
- 川田誉音 (2003) 「英国におけるソーシャルケアの標準化 ソーシャルワークの専門性との関わり」『日本福祉大学社会福祉論集』109 ; 35-57.
- 藏野ともみ (2005) 「ソーシャルワーク論におけるアセスメント概念の位置づけ」『人間関係学研究：社会学社会心理学人間福祉学：大妻女子大学人間関係学部紀要』7 ; 187-193.
- McDonald, Ann (1999) *Understanding community care: a guide for social workers*, Basingstoke: Macmillan.
- 松岡敦子 (2001) 「アセスメントにおける技法とツールの意味」『ソーシャルワーク研究』26 (4), 267-272.
- Meyer, Carol H. (1993) *Assessment in social work practice*, Columbia University Press.
- Milner, Judith & O'Byrne, Patrick (2002) *Assessment in social work*, 2nd Edition, Palgrave Macmillan Press Ltd.
- Milner, Judith & O'Byrne, Patrick (2009) *Assessment in social work*, 3rd Edition, Palgrave Macmillan Press Ltd.
- Moxley, David P. (1989) *The practice of case management*, Sage Publications, Inc.
- 中村佐織 (1988) 「ソーシャル・ワークにおけるアセスメントの意義 「診断概念」と「アセスメント概念」

- の比較を通して」『社会福祉（日本女子大学社会福祉学科）』28/29；87-95.
- 中村佐織（1994）「ソーシャルワーク援助におけるアセスメントと記録方法の模索」『ソーシャルワーク研究』20（1），4-9.
- 中村佐織（1995）「ソーシャルワーク援助プロセスのアセスメント その方法と具体的展開（ソーシャルワークにおけるアセスメント）」『ソーシャルワーク研究』20（4），267-274.
- 中村佐織（1996）「ソーシャルワーク実践過程としてのアセスメント研究の意義」『社会問題研究』46（1），79-96.
- 中村佐織（2002）『ソーシャルワーク・アセスメント コンピュータ教育支援ツールの研究』相川書房.
- 小原眞知子（2000）「ソーシャルワーク援助におけるアセスメント概念の理論的一考察」『日本女子大学大学院人間社会研究科紀要』6；37-51.
- 大野勇夫（2009）「生活アセスメントと社会福祉実践の専門性」『総合社会福祉研究』34；11-19.
- O'Sullivan Terence（1999）Decision making in social work, Macmillan Press LTD.
- 太田義弘（1995）「ソーシャル・ワークにおけるアセスメント その意義と方法」『ソーシャルワーク研究』20（4），260-266.
- Parker, Jonathan & Bradley, Greta（2003）Social Work Practice: Assessment, Planning, Intervention and Review, Learning Matters. (=2008. 岩崎浩三・高橋利一監訳『進化するソーシャルワーク 事例で学ぶアセスメント・プランニング・介入・再検討』筒井書房.)
- Perlman, Helen Harris（1957）Social casework. A problem-solving process, The university of Chicago Press.
- Pincus, Allen, & Minahan, Anne（1973）Social work practice: model and method, F. E. Peacock.
- Rapp, Charles A., & Goscha, Richard J.（2006）The strength model: case management with people with psychiatric disabilities, 2<sup>nd</sup> ed. Oxford University press.
- Richmond, Mary E.（1917）Social diagnosis, Russell Sage Foundation.
- 齊藤順子（1995）「ソーシャルワーク実践におけるアセスメント手法の模索」『社会福祉（日本女子大学）』36；64-79.
- 齊藤順子（1996）「ソーシャルワーク実践におけるアセスメントをめぐる課題 相談機関におけるアセスメントを中心に」『日本社会福祉実践理論学会研究紀要』4；57-68.
- Schön, Donald A.（1983）The reflective practitioner : how professionals think in action. (=2001, 佐藤学・秋田喜代美訳『専門家の知恵 反省的实践家は行為しながら考える』ゆみる出版.)
- Smale, Gerald., Tuson, Graham., with Biehal, Nina., & Marsh, Peter（1993）Empowerment, Assessment, Care Management and the Skilled Worker, National Institute for Social Work Practice and Development Exchange.
- 竹内愛二（1938）『ケース・ワークの理論と実際』巖松堂書店.
- 竹内愛二（1949）『ケース・ワークの理論と実際』巖松堂書店.
- 竹内愛二（1950）『ケース・ワークの技術』中央社会福祉協議会.
- 山辺朗子（2011）『ジェネラリスト・ソーシャルワークの基盤と展開 総合的包括的な支援の確立に向けて』ミネルヴァ書房.
- 米本秀仁（2005）「基調講演 ソーシャルワーク実践とアセスメント ツールは必要なのか？」『ソーシャルワーク研究』31（2），90-103.
- 吉村夕里（2003）「精神障害をもつ人の生活世界のアセスメント リハビリテーションにおけるソーシャルワークの視点」『竜谷大学大学院研究紀要 社会学・社会福祉学』11；73-90.
- Young, Alexander S., Forquer, Sandra I., Tran, Anh., Starzynski, midge., Shatkin, Jess（2000）Identifying clinical competencies that support rehabilitation and empowerment in individuals with severe mental illness, Journal of Behavioral Health Services & Research, 27（3），321-333.